

リ舟大工町菓子商平野屋明助方へ職住居鳥金殿世話ニテ此ノ主家ハ金融甚シク菓子屋ニハ珍シク内福凡ソ見込ミ菓子商ニテ判り兼ね住居繁栄ス我素ヨリ長崎製菓子職覚へ度心組ニテ一心勉強スルノミ朝早く夜業致シ相働キ居候へドモ何分江戸ト長崎トハ風違ヒ菓子ノ作ヘ萬事違ヒ一通り覚へ次第帰リ度心組ニテ氣張ツテ一日業務ヲ怠リ能ク覚エ込マウト思ヒ働キ之故前ヨリ居キノ人ヨリ主家信用吾同商ノ家ヘモ養子勸メノ事兩三度養子世話受ケ候何分江戸迄遠方ノ処氣乗落チツキ兼ね候然共主人ノ信用大ニ有リ砂糖買入レ又ハ金子貰納メ萬事ニ使ヒ足掛ケ四年間相働メ其ノ中同二分金徳川通貨同様ニ偽テ通用相初マリ長崎市中目ノ見ヘ得ル商人ハ受取り申サス其ノ時薩摩士族勢強ク無理ニ我國表二分金通用ナサレ度強ク申立市中困リ我ハ江戸産レ素ヨリ金銀通貨見覺有リシ候ニ付金銀取計リ萬端多ク交易品モ少々ツツ宛見覺ヘ然共凡ソ見計ヒ取止ムル事無シ元年ヨリ慶応四年迄相働メ然ニ慶応三年四月浦上ト申ス処ニ耶蘇教信心致スモノ其ノ浦上村一統二百七八十名バカリ人民召取ニ相成リ此ノ人達ハ肥前大村方ヘ縄付ノ儘連行キ其ノ一命迄失ヒ候事ト相成候唯今明治何年ト相成リ候ヘバ此ノ耶蘇教ヲ追々信心致ス人多ク内国一統ニ広ク教堂迄建テ盛ト相成候事其ノ時ノ官ノ法律ノ為一命ニ相カカリ申ス可キ事申サズ候慶応四年正月帰り度暇願申候処正月五日長崎奉行小汽船浪花丸ニ乗込ミ江戸表ニ逃ゲ去リ正月五日夜同所受取方ニ参リ大名土屋大村軀島筑前肥後此ノ五名軍ノ堅メ致シ今ニモ戦争相始ルカト思ヒ明六日早朝ニハ東行屋敷明渡し如何相成ル事力一寸判兼ネ候市中往來止メ通行人モ無ク然ルニ八日トナリ大阪西京騒動ヲ友軍徳川戰ヒ西京伏見淀二日戰ヒ三日大阪城焼失徳川慶

喜公堺港ヨリ火船ニ乗り江戸表ニ逃ゲ去リシ趣キ漸ク相判リ一時マギレ申候此ノ一条ニ付諸国共旅人多大ニ嚴シク通行六ヶ敷相成候此ノ一件ニ付平野屋明助方ニテモ私ニ話大イニ歎ケキ候之故二月十五日迄延バシ置キ愈々二月十五日限り暇ヲ取り満三十三ヶ月間賃借勘定致シ殘金十五円四十錢受ケトリ但シ一日手間賃天保銀四百匁定メ尤モ先方勘定書行先ニ精算書別紙纏メ置キシ候但シ慶応四年辰改明治元年同所屋唐町三浦金次殿方ヘ右御世話ニ相成候義務ヲ之ニ御礼致シ二月十八日長州表舟ニテ出立シ茂木ヨリ肥前港迄渡リ雲仙山ニ参リ右山ニテ三日入湯致シ之ヨリ島原肥後熊本迄渡海致シ候同町抵屋町泊リ清正公ニ参詣致シ筑後久留米水天宮ニ参詣致シ追々筑前各所箱崎八幡宮宇佐美八幡コヲラ山西府天満宮等モ参詣致シ二月二十六日下関増屋金次郎方迄着致シ其節十七ヶ年月同人ニ面会致シ候同日三時ヨリ大阪迄早舟ニ乗込ミ候早速出帆島參詣致シ順風悪シク大ニ延引三月十七日漸ク兵庫迄無事着尤モ小舟ノ事故瀬戸海港廻リ多分所舟面白事有リ候ヘドモ職人ノ路銀少々漸ク泊賃位ヨリ之無ク金ハ使ツタ事無シ極メテ切詰メ此ノ時金一兩三分ヨリ殘金無ク候処長崎ヨリ神戸開港ト相成候ニ付初商賣又ハ英人ニ当頭何カト長崎人多ク…(これ以後記録なし)



## 座談会

### 金子直吉を語る

#### 土佐弁同志の思い出

坂本 私は武蔵先生のお父さまでいらつしやる金子直吉先生の名前を口にするだけで、今でも直立不動の姿勢になります。今日あるのは、一にも二にも金子直吉先生のお陰だと思っていますから、そのご子息にお会いできるなんて、大変嬉しゅうございます。

金子 これはこれは恐縮です。

坂本 お話いたしますと、武蔵先生にもはつきり土佐弁のアクセントが残っていますね。

金子 そうですか、自分では余り意識したことはありませんが……。私の生まれは土佐ではなく、神戸です。育ったのは須磨なんです、尋常五年生の終わりが、親父に呼びつけられて「土佐へ行け」といわれました。その時、いつにない厳格な態度でね。「どうもお前をここに置いておくと、店の者が甘やかして困る。土佐へ行つて苦労して来い」と。大正六年だったと思います。それで、その四月に高知県立第一中学校へ入ったんです。いや、その前に、第三尋常小学校の六年生になっていましたから、中学へ入る前にすでに土佐にいたことになりますね。

坂本 そうですか。

金子 高知市内に家を借りて、亡くなった兄の文蔵と一緒に住んでい

ました。幸い、世話をしてくれる女中さんがいたものですから、兄弟二人の暮らしは別に不自由さはなかったですね。そこからしばらく歩いた通町一丁目に母の実家がありましたから。そこから北へ行くと本町筋で、そこには叔父の家もありましたし。

坂本 お兄さんは何歳ぐらいでしたか。

金子 何歳かなあ、確か中学二年生ぐらいじゃなかったかな。

坂本 お母さんの実家は傍士<sup>ほうし</sup>という姓じゃないですか。

金子 そうです。

坂本 珍しい姓ですから記憶していますよ。

金子 そのころ、遊んでばかりいたので、両親が心配して、家庭教師をつけてくれたんです。とはいっても先生の所へ習いに行くんですが、それがほとんど商業学校の先生の所なんです。坂本さんは高知商業をご卒業だから、当時の横山校長とかいう人、覚えていませんか。

坂本 覚えていますよ。

金子 この先生には教わらなかったんですが、玉真<sup>たまま</sup>という英語の先生に教わりました。

坂本 ハッハッハ……玉真先生ですか。覚えていますよ。

金子 おったでしょう。それから、もう一人の英語の先生で木原といいましたか。

坂本 よくご存知ですな。私が大正十一年に高知商業を卒業していますから、武蔵先生とは同時代に学生だったわけですね。

金子 これは面白いご縁ですね。坂本さんは野球の試合のことは覚えて

坂本 ……?

金子 今高知商業は天下に響く野球の名門となっていますが、当時は一中の方が強かった。

坂本 アッハッハ……そうでした、そうでした。

### サムライだった金子直吉

桂 お話がいぶすすんだところで、そろそろ金子直吉論に入りたいと思います。そのきっかけとして、十年ほど前に、当時の朝日テレビで一緒に一緒に番組で、先生が証言されたオヤジ金子直吉論を、ご紹介したいと思います。

金子 どういう番組でした?

桂 『歴史を旅する』というシリーズもののひとつで、『関西財界の先駆者・金子直吉』という作品でした。確か、全国放映です。

そこで、先生は、オヤジ直吉さんについて、こうおっしゃってられます。

「喜怒哀楽をおもてに出して、かえってそこに人間味があふれるということが多いと思いますが、父の場合には、そういうことはほとんどなかった人でございます。こういうところは、サムライ的なところが性格上かなり強かった人ではなかったかと思っています。

喜怒哀楽をほとんどおもてに出さなかったというのは、逆に申しますと、ある意味のデフェクトといったものもあったんじゃないかと思っています。

父はほとんど女性関係ということのなかった人でございます。これはひとさまで伺った話でございますが、或る父の友人が芸者をとら

えて、「お前たち、もし金子を射落したら五百円やる」といったそうです。すると芸者衆はその五百円を貰おうとして大いにはげんだそうでございますけれども、ひとつも成功しなかったということです。

これでわかるわけで、そういう意味の、ある意味の情愛というものが欠けていたのではないか、デフェクトがあったんじゃないかと、思うしだいでございます。

サムライ意識でありますから、子供に対する愛情というものは、直接はあられませんが、腹の中では、われわれ不肖の子たちに對しても無限の愛情はもってはおりましたが、家庭における行動というものが、人間味をあらわすというようなことは、非常になかった人でございます。

金子 よく記録しておられますねえ。

桂 直吉さんのサムライ根性というのは、金子家のルーツと無関係ではないようです。元龜、天正のころ、東伊予に雄飛し、智勇拔群の名將、猛將といわれた……。

金子 金子備後守元宅です。

桂 橘江城の城主、つまり金子城のお殿様だったわけですね。この備後守が天正十三年に豊臣秀吉の四国征伐のとき……。

金子 秀吉方の部將、小早川隆景を迎え討つわけです。

桂 しかし、衆寡敵せず、一族郎党の六百余人とともに、壮烈な戦死を遂げます。

金子 そのとき備後守は自分で腹を切って死んだちゅうて、オヤジは非常に自慢しとった。

桂 子供さんたちはみんな土佐へのがれて長曾我部元親をたより厚遇されるわけですね。

### 母の影響もあつた歌づくり

桂 ところで、直吉さんは、ある時期から、この金子備後守元宅を非常に意識しはじめますね。そして、あの名句を捻り出します。

金子 「天正の矢叫びを啼け時鳥」。

桂 そうです。この句は、田宮記念会館の、入口正面から二階へあがる螺旋階段の背面壁に、久しく大書して掲げてあつたのを、私は記憶しております。

坂本 直吉先生はたくさん句をつくっておられるが、誰か師匠にでもついて勉強されたんですか?

金子 いや、師匠がいたわけではありません。母の徳子がホトトギス派の俳人で、句をつくっておりましたので……。

桂 高浜虚子先生などを客として迎えられたことも……。

金子 ええ、ありました。仕事一途で席の温る暇のなかった父でしたから、俳句は、母にとっては、ただひとつの嗜好<sup>たしなみ</sup>だったと、思うのです。たしか、仙女と号していました。

桂 句集に『夏草』がありますね。そういえば、お家さんの鈴木よねさんも歌人で、『波の音』をものしておられますね。

ところで、先生のお生まれになったところは、神戸の……。

金子 雲井通りの家です。明治三十八年の一月でした。この雲井通りは三宮駅から東北に向って、ほど遠からぬ位置にありました。スラム街に近かったと、記憶しております。当時四十歳のオヤジは、ここか

ら栄町三丁目にあつた合名会社鈴木商店へ人力車で通勤して

いましたね。

桂 すると、須磨

二の谷の家へ、ご一家が移られたのは?

金子 明治四十三年ごろ。そして、大正

二年のころまでこの家にいたわけです。

桂 そうですか。

じゃ、直吉さんが大正六年に、あの「天

下三分の宣言書」を書き上げた一の谷の元外人屋敷の洋館へは、大正二年ころに移られたわけですね。

金子 そういうことです。須磨二の谷に住んでいたころ、十歳にみたぬ僕は、よく栄町三丁目のお店に遊びに行つたものです。坂本さんは、もうそのころは鈴木にいらつしたんですか。

坂本 僕は天正十一年の入社だから、全然いないころのお話ですね。

桂 鈴木商店の本店は、大正三年には東川崎町一丁目の元ミカドホテルに移ります。そして、この店が大正七年の米騒動で焼き打ちされるわけですから、坂本さんが入社されたころは、海岸通り一丁目のビ



出席者 写真左より  
東京大学名誉教授 日本学士院会員 文学博士 金子 武蔵  
神戸大学教授 経済学博士 桂 芳男・坂本 寿 (敬称略)  
杉並区高円寺・金子武蔵氏邸にて 昭和60年12月

ル、ということになりますね。

坂本 うん、そういうことやね。あのころも神戸の街はハイカラでした。

### 筆を使って考える父

桂 ところで、さっきの栄町三丁目のお店で、武蔵少年の好奇心をそそったものが、ございましたですね。

金子 そうなんだ。Gペンなんだ。そのお店の二階南側の外国部の机の上で、キラキラと光っていたのを見つけてね……。これが欲しくて欲しくてたまらなくなつて。無断で失敬しちまつて、えらく叱られたこともあるんだよ。ワハハハハ……。

坂本 直吉さんも、執務のときにはペンをつかつておられたんですか。

金子 いや、オヤジは、どういうわけか、ペンを好まず、生涯筆墨をつかい続けていたね。とにかく僕はペンをつかつているオヤジを一度も見ることがないんだ。

坂本 ああ、そうですね。

金子 オヤジはいつも筆墨に親しんだといえるね。

桂 ということは、直吉さんにとっては、筆と硯はものを考えるうえで大切な小道具であつた……といえるんじゃないでしょうか。

金子 うん、そういうことだね。筆で巻き紙に書くんだ。

坂本 先生は、子供のとき、よく墨をすらされたんじゃないですか。

金子 一の谷時代にはよく墨をすらされたもんだよ。お駄賃に、元町の老舗、風月堂の、銀紙包みのチョコレートをもらつた。それが嬉しくつて。

桂 撃つのは、オヤジさんと、プロハンターの田丸さんと吉田さんの三人だけだったんですね。

金子 そうなんだ。オヤジは舳先近くの船ばたで銃身を支えつつ撃ち、ほかの二人はその後には並び立つて撃つわけなんだ。みな当たたとすると、六羽落ちる勘定だが、これまで四羽以上が落ちたためしがない。

桂 ということは、言い換えると、オヤジさんのタマが当たったことは一度もないということですね。

金子 その通り。ところが、このときに限つて、どういう風の吹きまわしか五羽落ちてきたんだ。みんなビックリしよつたね。

坂本 何かの間違いじゃないか……と。

金子 そう思いながら、その落ちた鴨を取りあげに行くために、和船のともづなを解いた途端に一羽がいきおいよく飛び立つて逃げていきよつた。

桂 タマがかすつて、鴨は気絶しとつただけ……。

金子 ワハハハハ。そう、至近弾ちゅうやつじやつた。しかし、西の山へ傾きかけた夕日を浴びて、空高く舞いあがる鴨を見上げながら、オヤジは、「あれは大きかった」と何度もくり返しながらくやしがつておりましたなあ……。

坂本 それはまっこと残念な……。

金子 しかし、どだいオヤジは僕と同様、ひどい近眼じやつたから、そもそものが正確に見えるはずがない。したがつて的中するはずがないわけなんだ。

それでいて鉄砲撃ちがむやみに好きじやつた。下手の横好きとはま

桂 オヤジさんは、巻き紙にサラサラとしたためる。しかし、やがて行き詰つて考え込む……。虚空をにらむポーズ。そしてまた書き続ける。そこが、わらべの……。

金子 そう、悪童のつけ込むチャンスで、手を出すと、オヤジは息子にチョコレートをいくつやつたかを忘れて、なんぼでもくれる。

坂本 うーん、なるほど……ねえ。

金子 ともあれ、筆硯を友としていたオヤジは、書には習熟していたといえるね。

### 鴨猟のエピソード

桂 ところで、先生の二の谷時代に、オヤジさんについての面白いエピソードがございますね。

金子 それ、どういうこと？

桂 別府湾での鴨狩りのことですよ。プロの狩猟の名手、二人を伴つて、二連発銃で撃つて、四羽以上は絶対に落ちるわけなのに、五羽も落ちたという……あの話ですよ。

坂本 僕は始めて聞くがねえ。

金子 ワハハハハ……。そうそう。あれは明治四十四年の暮もおしつまつたところのことじやつた。学校が冬休みになったので、家庭教師の小野三郎さんに連れられて、オヤジが待っている別府に向つた。

坂本 それが、先生の「初めての旅行」だったわけですね。

金子 そうなんだ。鴨猟は正月二日のことじやつた。鴨猟というのは、ランチが近づく、鴨の群れが飛び立つ、そこを二連発銃でズドンと撃つのだ。

さにこのことですよ。

桂 しかし、直吉さんの下手くそは周知のことじやつたんですか。

金子 そうやつたね。だからデッキには爆笑が巻き起つた。

桂 狩猟は文字通り、直吉さんの唯一の趣味というか、息抜きだったんですね。

坂本 うーん。それが趣味やつたんな。僕は初めて聞いた。

金子 ともかく、オヤジのみやげだという鴨や雉をよくごちそうになつたが、それはみなオヤジ自身の撃つたものではないことを、この頑童も感知しようなしいです。

桂 先生のご家庭教師は、小野三郎さんの次は、橋本隆正さんでしたね。

金子 そうです。小野さんが神戸商高（現神戸大学）を卒業して鈴木が社員となつてしまつたので、同じ学校へ入学してきた橋本さんが、代つて書生になられたからです。

坂本 小学校の何年生ぐらいからですか。

金子 僕の小学校の二年生ぐらいの時からでした。五年生ぐらいまで、みてもらつた。

桂 その橋本さんのご意見によりますと、直吉さんは鈴木破綻（昭和二年）後も、死にいたるまで東奔西走、鈴木全盛時代と少しも変らぬ活躍が続けられていますね。書画骨董についても造詣が深く、直吉さんに資金と余暇を与えたなら、「松方コレクション」にない、もっと幅の広い、金子コレクション」ができ上つていたであらう、といわれ

ております。

金子 橋本さんは、岡山県備前市に在る閑谷<sup>いさた</sup>学校の出身でした。この学校は儒学の歴史にその名をとどめている名門校なんです。

桂 だから橋本先生は、武蔵少年に、論語をたたき込もうとされたわけですね。たとえば……。

金子 「仁<sup>に</sup>里<sup>り</sup>をもつて美となす」とか……。

桂 「巧言令色鮮<sup>あ</sup>し仁」とか……。

金子 うん、そういった句を暗誦させるんですわ。こっちは往生したんですがね。明日起きたらテンコチを釣ろうとか、蟬をとろうとかばかり考えていた、ゴンタ（腕白小僧）ざかりの時代でしたから。

坂本 しかし、そのおかげで、ゴンタも行状が改まり、成長を遂げるわけでしょう。

金子 そうだねえ。両句を合わせると、意図はほぼ明らかなんだ。つまり、今のようにゴンタばかりせず、ひとさまには親切にしないでならぬが、同時にオベッカに耳を傾けてはならぬ、ということなんだから。

#### 直吉にも意外な一面が

桂 そのころですね。オヤジさんが寝間着姿で一階の書生部屋において来られて……。

金子 橋本先生の前にはちゃんと坐って、儂が神妙に教えをうけているのを見て、土佐弁で、「おお、勉強しちよるか、しちよるか」といって、さも満足そうだったことが、二度ほど、あった。

桂 二度ほどですか。やっぱりサムライだったんですね。

う出された)を聞いて、「ヒン」という前つづりの意味を、といった具合に、ドイツ語を、子供のときから、それこそ体で身につけていかれたわけなんですね。

ところで、東大進学、それも哲学科への志望をきめて、そのことをオヤジさんに申し出られたとき、オヤジさんは何かおっしゃられましたか？

金子 大正十三年の夏のことだったが、オヤジは、「食うことは？」といったきり何もいわなかった。

桂 重<sup>し</sup>い言葉ですね。しかし、先生が東大でヘーゲルの『精神現象学』の翻訳に着手されて、岩波書店から昭和七年にその「上巻」を出版されました。どうでしたか、そのときの様子は？

金子 岩波から翻訳「上巻」が届いたので、オヤジに渡しに行ったんだ。

坂本 昭和七年という年は鈴木破綻から五年目で、整理再建のメドがついたころに当たりますね。直吉さんは乃木神社前の借家（赤坂区檜町五）で頑張っておられたから、そこへもって行かれたわけですね。

金子 そしたら、それを読むと言うんだよ。

桂 直吉さんは、「勉強してわからぬものはない」という信念でしたからね。

金子 そしたら、庭の木陰に椅子をもつて来いと言うんだ。妙なことを言うなと思ったが、オヤジが言うんじゃ仕様がないうんでもって行つた。そしたら、読みだしたんですよ。

しかし、なんぼオヤジが自信があるといってもこれはどうせわから

ところで、先生は、京都の三高（旧制第三高等学校）の文科乙類（ドイツ語）を経て、大正十四年四月に東大へ進学されるわけですが、この進学志望決定のキッカケには、一の谷の隣人でドイツ人技師のシュトレーロー家との、家族ぐるみの親交ということも重要だったわけなんです。

金子 そう。この親交が儂をドイツへのあこがれへと、誘った。

桂 シュトレーローさんは鈴木のお雇い外人だったんですね。

金子 いや、違うんだ。それは調べたことがあるから大体まちがいないが、本当の雇い主は艦政本部だった。艦政本部はわが国の造船技術のレベルアップを意図してドイツの造船会社から技師のシュトレーローさんを雇ってきたものの、外国人を艦政本部には置けないということで、おもてむきは川崎造船所の雇いということにして、実際は艦政本部が給料を支払っておったのです。

桂 いやあ、そうだったんですか。貴重な証言ですね。ところで、シュトレーロー家に、武蔵少年を「ドイツ兄さん」と呼んでいた幼馴染がおられましたね。

金子 オツアンという女の子とボーイさんという男の子でした。

桂 「海へ行かないか」というとき、オツアンたちは、「ウミ・ゲーエン」とか叫んで……。

金子 家のうしろに、少し空地があつて、そこで近所のオランダ人のピッチェという男の子も加えて、よく相撲をとった。その時、儂は相撲が強かったよ。

桂 そこで、「ドウ・ビスト・シヨーン・ヒンゲゼット」（お前はも

へんだろうと、高をくくって二階から見ていたんだ。ところが、三十分たつても、四十分たつてもやめんのや。しばらくたつてからまた読むんだよ。そしたら、短冊と硯をもつて来いと言った。どうするつもりかなと思いがらもって行つたんだ。すると短冊にサラサラと筆をおろした。

#### 屁化留を諷す

蝉なくや樹下の老爺は聾なり

と書いたんだ。

坂本 どういう意味でさううか。

金子 「この本はいくら読んでもわからないが、それは樹上で蝉がいくらなくても、俺のような老人には聞こえないのと同じだ」という意味なんです。

桂 それでヘーゲルを「屁化留」としたわけなんですね。

金子 句になつていないにしても、瓢逸ではある……。

桂 直吉さんは、「哲学はむづかしい学問じゃのう」とおっしゃりながら、実はヘーゲルの弁証法などを側近に語っておられたそうですね。

私は、さっきの句をみて、切々として滲み出るような親の愛情を感じます。かつて自分の手丘の一人に投じたいと思いがら、この子はこのままにしておく方がせめてもの親の情であると観念した。その子が、いま凄<sup>ひ</sup>い学者に成長した。その喜びを、直吉さんなりに精一杯、表現しているように思えてならないのです。

## 親父の魂胆

金子 少年時代には熱心に工場通いをやっただよ。橋本さんと一緒が多かった。オヤジには魂胆があつたのだと思う。それを橋本さんが呑み込んでいて、恩人に報いたいという誠意からこのボッチャンの将来に資せんとしたわけなんだ。

坂本 ご恩のある御主人の後を継ぎ実業家となるひと、と合点した。

金子 そこで、いまのうちにたたき込んでおくに限るッちゅうことで、さっきの論語の文句を暗誦させたところがあるんだ。

坂本 なかなか根が深い。ところで、見学された工場は？

金子 姫路近くのセルロイド工場があつた。

桂 日本セルロイド人造絹糸の網干工場ですね。

坂本 ダイセルの前身やね。いまでも栄えています。

金子 それから鳴尾の製油工場も訪ねた。

桂 そこでは、京大出身の技師長、楠瀬時治さんが案内されたそうですね。

金子 楠瀬さんは高知の床屋の息子さんやった。坂本さんもご存知ですらう。

坂本 知っちゃいます。

金子 そのころ、儂が感銘をうけた本に、スマイルズの『西国立志編』（中村正直訳）があつた。

桂 ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の世俗版ともいわれた名著『セルフ・ヘルプ』が原著ですね。

金子 この本の、とくに発明家についての記事に興味を覚えたが、こ

のことが工場見学とは無縁とはいえなかったね。

桂 すると先生は、まだ確たる立志のなかった時期に、オヤジさんの影響をつよく受けておられたといえるわけですね。

その先生が、結局は東大の哲学科に入学されたんですから、橋本さんが、「裏切られたのは私だけではない」とおっしゃったのも、理屈があつたわけだ。

ところで、先生にヘーゲルの『精神現象学』を訳せと命じられたのは、伊藤吉之助先生ですね。

金子 そうです。

桂 西田幾太郎先生のお嬢さんとの縁談をもつて来られたのは？

金子 それは出隆先生だ。

桂 和辻哲郎先生も尽力されていたと私は聞いておりますが。

金子 エッ？

桂 先生は昭和十三年に倫理学科の助教授に就任され、和辻先生の後継者となられるわけでしょう。それでてつきり。

しかし、挙式までの段取りは田宮嘉右衛門（神戸製鋼所社長）さん御夫妻がちゃんとされたわけですね。

金子 そうです。

あのねえ、坂本さん。その床の間に掛けてある掛軸の絵をご覧下さい。この日本画は、和辻先生の作品ですよ。この日本画は、素人の作としては最高水準のものだと儂は思っちゃるんだ。

坂本 これはみごとな浜ゆうですなあ。たおやかな浜ゆうの花が三つ白く咲いておる。

金子 土佐の長浜のですよ。絵の上の為書にこう書いてあるでしょう。

「一日、金子君がきて中学時代に見た浜ゆうのことを語って帰って行ったが、たまたま河野興一君にその種をもらったので、江古田の家の庭にまいたところ、こんな見事に咲いた」と。

坂本 一中時代に長浜で見た浜ゆうというわけですね。

金子 佐渡ヶ浜の西の方だ。

桂 この絵を和辻先生にお願いされたときはいつでしたか。

金子 先生のご退官のときです。ご退官も近づいたある日、「何か記念にかいておいて下さい」といって、ガラになく巻いた唐紙をお渡ししておいた。すると、ご退官の、その日にまた巻いたまままでお返し下さった。

桂 しかし、そのとき先生は、それを掛けるべき床の間がないというところで、奥様に大切に保存するようにとおっしゃり、また巻いたまままでお渡しになった。そして、先生ご自身が昭和四〇年に退官されることとなり、掛けるべき床の間もできたというわけで、表装して、掛けてみて、ビックリされたというわけですね。

坂本 あんたもくわしいねえ。

金子 この絵を見ると、出来の悪い後継者の行く末を和辻先生がいかに深く案じておられたのがわかってくる。

「いずれの日か故郷に帰らん」

桂 ところで、オヤジさんが亡くなられたのは、終戦直前の、昭和十九年二月のことでしたね。

金子 そうです。空襲警報のサイレンがけたたましく鳴る夜半に世を

去りました。

桂 それからその年の十月にお母さんもなくなられた。

金子 オヤジが亡くなる二、三日前に、「家内を呼んでくれ」といったときには、みんなビックリしてた。女房だけは数のなかに入れてあつたんだから。

坂本 僕は、そんな感じがしましたね。

金子 何かいい残したいことがあつたらしいなあ。「家内を呼べ」「家内を呼べ」って言うちよつたんですから。

桂 当時、お母さんは中風を病んでおられて、浦和の妹さんのお宅で養生されていたんですね。

金子 その母が同年に死んだのは、やはり母が父のあとを追ったような気がしてならない。

桂 先生はかつて、「いずれの日か故郷に帰らん」とおっしゃっておられました、「故郷に帰らん」というのは、つまるところ具体的には、「オヤジさんのもとへ帰らん」ということじゃなかったんですか。

金子 そういうことなんです。

ところで、永井幸太郎さんや楓さんたちがなおご健在で、坂本さんの今日の成功ぶりを見て貰えたら、さぞ素晴らしいことだったろうにと、思われてなりません。

坂本 ありがとうございます。

——「雲は流れる」より抜粋——